

# 「運命の女」

—初稿—

2022/12/2

川尻佳司

〈人物表〉

岩上 武 (40) サラリーマン・中小企業・営業

藤川 千賀子 (45) 編集者

藤川 邦弘 (48) 会社経営者

〈ログライイン〉

千賀子にプロポーズを断られた岩上武が千賀子の夫を刺して捕まる。

1  
北千住・千住マンション（15階建て）・7階千賀子の部屋  
（昼）

北千住の高層マンションの3LDKの8畳の千賀子の部屋。

部屋に面したベランダに昼顔が咲いている。

部屋の扉が開いて、シャワーを浴びてきた岩上武

（40）が入ってくる。

武を見る藤川千賀子（45）、ベッドに横たわって、

「そろそろ帰ってくるから、急いで」

武 「誰が？」

武、千賀子の隣に寝る。

千賀子 「今日は来ないでって言ったでしょ」

武 「好きな人の誕生日に会えないなんて、悲しいこ

とだよね」

千賀子 「困らせないで」

武 「でも、もう好きでなかったら、悲しみも感じな

いだろうね」

千賀子 「あの人は、こういうことにはバカみたいにうる

さいのよ」

武 「誕生日プレゼントがあるんだ」

千賀子 「え？」

武、鞆を取りに行き、中から指輪の箱を取り出して、

千賀子の前に出し、開けて見せる。

千賀子 「どういうつもり？」

武 「好きなら一緒にいたいと思うのは当然だろ

う？」

千賀子 「本気で言ってるの？」

武 「給料の3か月分じゃないけど、2・5か月くら

いかな」

千賀子 「ちよっと、どうして？ できないよ」

武 「もう愛なんてないのに？」

千賀子 「別れることはできない、そういう約束だった

じゃない」

武、椅子に腰かけ、窓から外を見る。

武 「いつまで、このバカげたことを続けるつもりなの？」

千賀子 「自分でも思ってる、でも愛があるから結婚生活を続けるわけじゃないの」

武 「世間体や経済的なことのために？」

千賀子 「あなたにはわからない、（指輪を見て）ロマンチストさんにはね」

武 「君はロマンチストではないと」

千賀子 「どちらか一つだけを選べないのよ」

武 「本当かな、どうしてボクとつきあったの？」

千賀子 「もういいでしょ、バカね、こんなことして、気持ちだけでも嬉しいよ、（指輪を武に渡して）さ、これはしまつて早く帰って、また連絡する」

武 「あんまりこういうことはしたくなかったんだけど」

武、携帯をとり、千賀子に見せる。千賀子の夫と女性が抱き合つて歩く携帯画像、二人がキスしている画像。固まる千賀子。

武 「偶然、六本木でバッタリ会ったんだよね、お仕事の人かなあと思ってたんだけど、歩いていく方向がお店と違うから……」

千賀子 「やめて」

武 「ごめん」

千賀子 「（笑う）おかしいよね、こんなふうに見せつけられると……」

武 「千賀子、一緒に出よう、君は幸せに生きていくんだよ」

千賀子 「できない」

武 「……まだ信じられないの」

千賀子 「ちがうの、あの人が浮気していることが信じられないわけじゃない」

武 「そんなに世間体や今の暮らしが大切なの？」

千賀子 「あっ」

玄関の扉が閉まる音。

邦弘の声「ただいま、ん、誰か来てるのか？」

千賀子「どうして？ いつも夕方まで帰ってこないのに」

武「千賀子、わかるだろ、もう終わらせる時なんだ」

千賀子「いい加減にして、どうなるかわからないよ」

武「僕は覚悟できてる」

千賀子「私はそうさせない、お願いだから、ベランダに出ている」

邦弘の声「千賀子？」

千賀子「はい」

邦弘の声「誰か来てるのか？」

千賀子「頼むから、ここから出ないですよ」

千賀子、部屋の扉から出ていく。

千賀子の声「今、消防設備点検の人が来てるの、ベランダを見てくれる」

邦弘の声「あれ、そうだったか、なあ見てくれ、3位の商

品は洗剤だって、ったくセンスがないよなあ」

千賀子の声「すごいじゃん、今日は随分早かったね」

邦弘の声「おお、お前の誕生日だって言ったら、なんか気をつかわせたみたいで、早く帰されたよ、そうだと点検の人にこの洗剤もらってもらおう」

武、邦弘の声に反応する。

千賀子の声「いらないよ、そんなの、だいたい失礼でしょ、そんな」

邦弘の声「いや、こういう洗剤は喜ぶ人もいるんだ、聞いてみるだけいいだろ」

千賀子の声「やめてよ、恥ずかしいから」

邦弘の声「何も恥ずかしいことなんかない、いらなかったらそれまでのこと」

千賀子の声「やめてってば」

千賀子の部屋に藤川邦弘（48）と千賀子入ってくる。

邦弘 「あつどうも、ご苦労様です、異常ありませんでしたか？」

武 「異常？」

邦弘 「随分変わった格好だな？」

千賀子 「最近の作業着はこういうのが流行りよ」

武 「建物に異常はないようですが、住んでいる方は異常があるようだ」

邦弘 「あなたいったい何者なんですか？」

武 「僕は千賀子さんを愛している者です、ちょうどいま一緒になろうとプロポーズしてたところなんですよ」

武、邦弘に指輪を見せる。

邦弘、千賀子を見て、

邦弘 「おかしいと思ったんだ、最近変に機嫌がいいことが多いから、で、この男と出ていくのか？」

千賀子 「自分だって浮気してるくせに」

邦弘 「言いがかりはよせよ、みっともない」

武 「みっともないのはあなたも同じですよ」

武、携帯の画像を邦弘に見せる。

邦弘 「あっ」

武 「千賀子、一緒に行こう、もうはっきりしたじゃないか」

千賀子 「いい加減にしてよ」

武 「えっ？」

千賀子 「つけあがらないで、もう終わりよ、出て行って」

邦弘 「あなた、こいつのことをまだよくわかってないみたいだな」

武 「わからない、あんたたち、どうして一緒にいるんだ」

邦弘 「もういいだろあんたも、こいつはあんたが思い入れるほどその愛ってやつをあんたに持ってはいないんだ」

武 「よくわかりましたよ、どうやら僕の方法が間

違ってたみたいです」

武、千賀子の部屋から出ていく。

邦弘 「どうする？ しばらく別居でもするか」

千賀子 「あなたが出て行ってよ」

邦弘 「はあ、また別居生活か、これで何度目だ？」

武、手に包丁を持って、千賀子の部屋に入ってくる。

武 「その必要はないですよ」

千賀子 「きゃあっ」

邦弘 「こいつ」

武 「千賀子、君には目を覚ましてもらうしかないみたいだね」

邦弘 「お前もとんでもないやつを連れ込んだな」

千賀子 「やめてっ、お願いだから」

武、邦弘に襲い掛かり、2人もみあう。

インターホンが鳴る。

千賀子 「誰か助けて」

千賀子、玄関へ駆ける。

邦弘 「痛てえ」

武の手から包丁が落ち、座り込む邦弘。

武、逃げようと千賀子の部屋から出ようとしますが、入ってきた消防設備点検の2人に捕らえられる。

千賀子が邦弘に駆け寄る。

千賀子 「あなた」

ベランダの昼顔が風に揺れている。

終